

オートバイとおじぎ草

大阪大学基礎工学部 中崎昌雄

今日は12月28日ですから、コロンボ計画でチェンマイ教員養成大学に来てもうそろそろ1ヶ月になります。この国は年中暑いから、暮れだといっても人はのんびりしていて、別に年の瀬などという感じはありません。そして1月1日だけが休みで、学校は31日までであるのです。この前の絵葉書で、学校へ行ったり見物したりするのに、暑くて歩けないからオートバイを買うつもりだとお知らせしましたが、昨日とうとう買いました。HONDA 90Z型です。

なにしろオートバイを運転するなど始めてですから、昨日は1時間ほど校庭をぐるぐる回って練習してからホテルに帰りました。無事に帰れたということから、この国のドライバーがいかに寛容の精神に富んでいるかがわかります。今日は皇帝誕生記念日で学校は休みですので、物見高い学生もいないだろうと思って、朝の校庭で練習することにしました。オートバイは自動車と違って止ったら倒れます。そのうえ両手はもちろん、両足でもいろんなことをしなければなりません。特にややこしいのは左足です。ギヤーチェンジです。

学校には休日でもかなり学生がいました。町の人手芸や料理の講習に来ているようです。なにしろ寮には800人もの学生がいて、これらが集って来て私の運転の練習を見物します。よほど面白いらしいのです。アメリカから例のケネディー平和部隊で来ている英語教師がいったように、チェンマイは世界でもオートバイ

の密度がもっとも高い町の一つですからオートバイそのものでなく、外国人が練習しているのが珍しいのです。

10時頃まで練習して、さあ遠出です。遠出といっても免許証もなければ、ナンバープレートもありません。税金は4年間に140パーツ(約2000円)払えばよいのですが、たった3ヶ月しか居ないのだという、OKだと言うのです。ホントかなあ。ホテルは町の中心にあり、学校はそれから2Kmほどの郊外にありますが、学校より先に行ったことはありません。車が空いているので、オートバイをトップギヤーに入れておそるおそる飛ばします。すぐ60Km/時です。朝風が顔にあたり気持ちの良いといったらありません。自動車のドライブはショーウィンドーの中から眺めているようなものですが、オートバイは速度が身体でわかります。身体を少しスイングすると鋭くカーブが切れて、乗馬と同じように「乗る」という感じがびったり来ます。空は例のように真青で、ところどころに白い雲が浮んでいます。北に向っていますから有名なお寺のある Doi Sutep の山は左手に見えます。行手にも山並みが続いています。低く見えますが、これでもビルマを経てヒマラヤに続く山脈のはしなのです。

右手の田圃はもう刈入れが終っていて、街道には大きな木が並び、向うに遠くヤシのある村が見えます。光線が強いものですから、並木を通り抜けると明暗の光の縞が鋭く交替します。

生産と技術

左手が開けて来ました。広い野原のようです。Doi Sutep の山の裾までひろがった野原です。牧場らしい屋根も見えます。

行ってみましょう。犬が数匹ねころんでいてむこうに馬が草を喰べています。もとの街道へ引き返えそうと思ったのですが、左手に堤のようなものがあり、細い道がついているのに気がつきました。大きな木が堤の上に5,6本生えていて、その下の木陰が涼しそうです。

堤を上ってみました。思いがけなくそこには青い広い池があって Doi Sutep に向って拡がっていたではありませんか。

微風が吹いています。木の間をもれた日の光が道に落ち、私の腕にもおちます。一周りできる道がありそうですから、回ってみましょう。オートバイはこれだから便利ですが、蛇がいないかとピクピク物です。向うから馬に乗った人がきます。一回りしました。オートバイを止めてみましょう。Doi Sutep が真正面に見えて池にその影の映っているあたりの、木の下にオートバイを立てました。

何という静けさでしょう。ときどき遠くをとおるオートバイの音がしますが、それが広い青い空に吸いこまれるように消えると、あとは平和な静けさです。

あの騒音を、さきほどまで自分も立てていたのかと苦笑します。カサカサ、カラカラという音がします。木の葉が風に鳴っているのです。日本の木とちがって葉が大きいので、こんな音がするのです。池のそばに寝ころんで見ました。今日も抜けるような青さです。ときどき、ポトン、ポトンと何か落ちて来ます。身体を起して見ると、それが木の実であることがわかりました。私の身体にも、私の真赤な HONDA の上にも休みなくふりかかります。

12月は乾期と雨期の境ですから、草はまだ緑で、原色の鮮かな花がここにも咲いています。

おや、耳かきの綿のような形で薄紅色のもの

があります。何気なく触ってみました。するとどうでしょう。その高さ5cmほどの草が見る見るうちにしぼんで、葉を折り畳むではありませんか。おじぎ草なのです。気がついて見ると、あたり一面いたるところに生えています。片っ端から触ると動物のように葉をたれます。それも速いのです。植物がこんなに速く動くのです。雲は無心に Doi Sutep の上を流れ、池はその雲の白さを映し、陽光は草にのぼす私の指にもふりかかります。バンコックの夜の暗い運河とあの臭いもタイで印象深かったものの一つですが、あれは人工のもので、おじぎ草に見た、この国の自然に対する驚きは忘れることがないでしょう。

こんなに自然が周りにあって、人は誰もこの池を訪ねようとしません。自然があまりふんだんにあれば、それが当たり前かも知れません。そして、彼等は今日も HONDA に乗って騒音をまきちらして、チェンマイの町まで西部劇を見に行くのです。

しかし、これが彼等にとってより自然で少し良きにつけ悪きにつけ進化というものです。

さて出かけましょう。地図がありませんからどこまで行くのかわかりませんが、もう少し先まで行って腹が空いたら引き返しましょう。もとの街道にまで戻って、北に向けて走ります。ヒマラヤに向けて飛ばしているのです。トラックなどどどんどん抜いて走ります。

私はタイ国人そっくりだと自分では思っているのですが、それでも外国人に見えるのでしよう、上にのっている若者が微笑して手を振ります。

湿地帯が左手に広げて来ました。アヒルが飼ってあります。高い木の上からブランコが吊ってあって娘さん(といっても20才ぐらい)がそれにのって揺れています。もう一人の女の子が籠を腕にかけて、何かはなしています。

手を振ると、手を振って答えます。

もう20Kmも来たでしようか。左手に兵隊のパラックがあるところを過ぎると、小さな村がありました。その村はずれのところで、引き返えそうと車を回転した突端にオートバイが動かなくなりました。見るとキャブレーターからガソリンが溢れています。オーバーヒートなのでしょうか。

道端に止って見てはじめて、日の光の強いことに気がつきました。何度スターターを蹴ってもかかりません。

それにしても、こんなキラキラした太陽の下ではたまりません。せめて木陰まで押しいきましょう。

この時、やっと動かないオートバイのいかに重いかがわかりました。

私はホテルにいまさき帰って来て、シャワーで汗と埃をおとしてからこの手紙を書いています。ですから、英語を話す人が一人もないタイの北方の村で、故障のオートバイをかかえてまったく安心してしまいそうな状態から何とかチェンマイまで帰りついたのは事実です。しかしこれはまた長い物語りになりますので、続きはつぎの機会にお話することにしましょう。

とにかくオートバイが、勢いよく爆音をもう一度あげたときの喜びときたらありませんでした。40分程まえまでは、池の傍であれだけ自然を称えて楽しんでいたのに、今は機械のメカニズムに感動しているのです。

勝手といえば勝手なものです。

なんとかオートバイが動くようになったのでこの小さな村の集会所のようになっている飯屋へ行って見ました。暑いからでしょう、板囲いもしてないのです。

そこで食べたパイナップルの旨まかったこと、村の人が寄って来ても何一つ彼等の言っていることがわからなかったこと、バンコックという私の言葉がやっと通じたとき人々が腹をかかえて笑ったこと、私を取りまいた善意と好気心に満ちた日に焼けた顔。

そんな切れ切れの事が、その家の高い天井からぶらさがった籠の中で揺れていた、赤ん坊の顔とともに思い出されます。

この村が Mae Rim というのは、あとで聞いてわかりました。

チェンマイを引き上げてバンコックに発つ前の晩、またオートバイにのって Mae Rim の村へ行って見ました。人々は近所のお寺のお祭りに行ったらしく、村人の影はありません。

小さな村の家は街道をはさんで寄りそうようにくろぐろと眠り、揺り籠だけが天井からさがっていました。

さよなら Mae Rim の村、もう一度おまえを見ることがあるでしょうか。私は星のない空に、そこだけほの白く見えるチェンマイの方にオートバイを向けて、スターターを強く蹴りました。